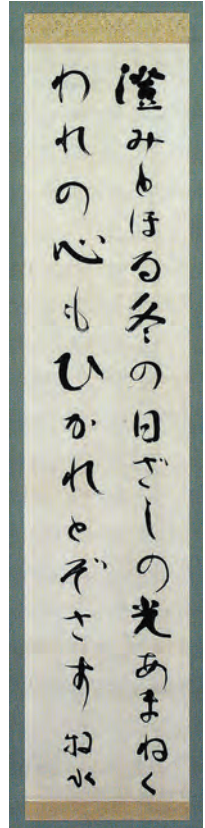


沼津市若山牧水記念館

第60号 平成30年3月1日

編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 <http://web.thn.jp/bokusui/>



澄みとほる冬の日ざしの光あまねく
われの心もひかれとぞさす
牧水

この短歌は、第十三歌集『くろ土』に収められている。初出は、『短歌雑誌』の大正八年新年特別号に「冬山水」と題して発表された十一首の中の一詩である。大正七年十一月十二日から二十九日までの上州信州への旅で詠んだ歌で、『短歌雑誌』では、「澄みとほる冬の日ざしは寒うしてわれのこころも光れとぞ射す」となっている。

この旅について、牧水は、『創作』の大正八年新年号の「編輯所便」に、次のように書いている。

十一日に十一月号の校正を終ると直ぐ十二日から上州信州の方へ旅行をした。上州では利根川のずつと上流まで溯り山と溪と黄葉と雪と落葉とを心ゆくばかりに眺め、更らに関東耶馬溪と称せらるる吾妻川に沿うて浅間山の裏に出で、其処を越して信州に入り、二十三日松本市で開かれた創作社信州人会に列し、甲州を経て二十九日夜帰宅した。今まで旅行した中の最も旅行らしい旅行で、命がけの思ひをも一二度したが、それだけに面白かった。歌も二百近く出来た。

『くろ土』は、大正十年に出版された。大正九年八月に、一家を挙げて沼津に移住して最初の歌集である。『くろ土』の序の一部を引用しておく。

これは歌集を出すことに感じて来たことであるが（二二の例外はあつたが）私は常に旧い作より現在の作、即ち今日の自身に近い時の作を自ら佳しとする者である。実をいふと私はまだ十分に自分自身を試してみたい気がしないのである。そして漸次にさうした迂闊な心持を責めて来てゐる者の様に思はれる。それで時を経ることに多少とも進歩は自分の上に表れて来てゐるかと思つてゐるのである。さういふなかにあつて今度のこの『くろ土』には特にこの感じが強く動いた。『やれやれ今になつて漸く自分には歌といふものが解つて来たのかなア』といふ気持である。延いては「これが真実の意味に於ける自分の処女歌集といふものかも知れない」といふ気持である。それほどに私はこの『くろ土』には愛著を感じながら編輯したのであつた。

二百近く出来た歌のうち、百五十九首は、「みなかみへ」と題して『くろ土』に収められた。「澄みとほる」の前後の歌を紹介する。

日輪のひかりまぶしみ眼をふせてゆ
けども光るその山の端に
山窪の冬のひかりのなかにしてかす
けく啼ける何の鳥ぞも

明治四三年というエポック―柴舟・牧水・啄木 花山多佳子

牧水というと、時代に関係なく別格の天性の歌人という扱いを受ける。あまり短歌史上では登場することが少なく、牧水は牧水として個別にその人生と作品を語られる歌人である。だからあえて、時代の枠組みの中の牧水、その時代の青年群像のひとりとしての牧水を考えてみたいと思う。

日露戦争後に登場してきた文学青年たちはまさに群像というべき。ほとんど同世代なのにびっくりする。日露戦争が終結したのが明治三八年、そのとき若山牧水、北原白秋、木下杢太郎、土岐善麿が数え年二二歳、石川啄木、吉井勇が二〇歳、前田夕暮、高村光太郎が二三歳、斎藤茂吉二四歳。この青年たちが、ジャンルを問わず、自由に交流し語り合い、いろいろな雑誌に発表するという明治四〇年代の気運が、それぞれの才能をはばたかせたのだろう。牧水だつてまさにその中の一人だったのだ。

明治四三年という年は社会的にも文学状況の上でも曲がり角、一つの転換期と言われる重要な年である。日露戦争終結から五年、大

逆事件が発覚し、石川啄木が「時代閉塞の現状」を書いた年で有名。文学ジャンル全体としては、前年くらいから、「耽美派」といわれる「パンの会」や「スバル」の全盛時代で、

白秋、木下杢太郎、吉井勇の南蛮趣味の詩や森鷗外の活躍があげられる。この辺りの交流史、文学研究はいまだに盛んである。その領域に牧水は入ってこない。当時（明治四〇〜四三年）鷗外の自宅で開かれていた「観潮楼歌会」にも参加していない。その後のいろいろな研究史の記述からは抜け落ちてしまう。

しかしこの四三年は短歌では牧水・夕暮時代と言われている時期にあたる。この年、牧水の第三歌集『別離』が出てかなりの人気を博したらしい。たしかに短歌史年表をながめると、明治三四年の与謝野晶子の『みだれ髪』以降、大衆的に読まれて人気の出た歌集というのがない。ちょうど一〇年後の、久々のヒット歌集だったのだ。当時はみんな小説や詩をめざしていて、明星時代のように短歌が主流ではなくなっていた。

牧水の『別離』のヒットとともに、この四

三年は短歌への気運が戻ってきた時代ともいえるのではなからうか。

明治四三年前後の、牧水を中心にした年譜をざっと書いてみる。

略年譜

明治四一年（一九〇八）数え年二四歳

七月 牧水 第一歌集『海の聲』出版

一月 「明星」終刊

明治四二年（一九〇九）

一月 「スバル」創刊（白秋・啄木・鷗外ら）

明治四三年（一九一〇）

一月 牧水 第二歌集『独り歌へる』出版

三月 前田夕暮『収獲』出版

牧水「創作」創刊

四月 牧水 第三歌集『別離』出版

土岐善麿『NAKIWARAI』出版

五月 大逆事件

八月 韓国併合

九月 吉井勇『酒ほがひ』出版

一〇月 尾上柴舟『短歌滅亡私論』

（創作）第一巻第八号掲載

一月 石川啄木「一利己主義者と友人の対話」(創作) 第一巻第九号掲載

* 牧水と啄木、この頃初めて会う。

一二月 啄木『一握の砂』出版

明治四四年(一九一〇)

四月 前田夕暮『詩歌』創刊

九月 牧水『路上』出版

大正元年(一九一〇)

四月 石川啄木没(二六歳)

六月 啄木『悲しき玩具』出版

九月 前田夕暮『陰影』出版

牧水『死か芸術か』出版

大正二年(一九一三)

一月 北原白秋『桐の花』出版

九月 牧水『みなかみ』出版

一〇月 斎藤茂吉『赤光』出版

* 大正二年は、ほかにも多くの歌集が出版された。短歌時代到来である。

明治四三年に特筆すべきは、牧水が総合文芸誌『創作』を創刊したこと、つづいて翌月に『別離』を出版したことである。両方とも東雲堂というかなり有名な出版社からの発行だ。このタイミングはすばらしい。注目されなかった第一歌集の『海の聲』と第二歌集の『独り歌へる』を合わせて、編集し直して第



若山牧水

三歌集『別離』として出版したというのも、相当である。一月の『独り歌へる』の出版から、たった二ヶ月間の作業である。その間に雑誌も創刊するというのだから実に意欲的だ。いわゆる牧水のイメージが変わる。

この、編集のし直しによっても『別離』の人氣が出たと言われる。歌集を編集、構成するといふ意識もこのころから始まったのかも。しれない。啄木の『一握の砂』も編集の巧みさで読ませるし、のちの白秋の『桐の花』、茂吉の『赤光』などもそうだ。そのことにも後で触れたい。

この明治四三年に書かれた三つの文章を紹介しながら、この時期が短歌という詩形において、一つの重要なエポックではなかったか、ということ語ってみたいのである。

まず一つ目は牧水の第二歌集『独り歌へる』の自序である。(明治四三年一月 二六歳)

この文章は牧水の歌に対する考えがよく出ているので、その一部を引用してみたい。

私は常に思つて居る。人生は旅である。我等は忽然として無窮より生れ、忽然として無窮のおくに往つてしまふ。その間の一歩々々の歩みは実にその時のみの一歩々々で、一度往いては再びかへらない。私は私の歌を以て私の旅のその一歩々々のひびきであると思ひなしてゐる。言ひ換へれば私の歌はその時々私の命の碎片である。

多人数のなかに交り都合よく社会に身を立てて行かうがために、私は私の境遇その他からいつ知らず二重或は三重の性格を添へて持つやうになつて来た。その中には真の我とは全然矛盾し反対した種類のものがある。自身にも能くそれに気がついて時には全く耐へ難く苦痛に思ふ。而も年の進むと共に四六時中真の我に帰つて居る時とは愈々少くなつて来た。稀しくも我に帰つてしめやかに打解けて何等憚る所なく我と逢ひ我と語る時は、実に誠心こめて歌を咏んで居る時のみで

ある。その時に於て私は天地の間に僅かに我が影を発見する。

「人生は旅である」というフレーズはここから来ていたのだ。むろん芭蕉の「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人也」が原典としても、こうもばつちり言っているのは牧水。日本の伝統的な無常観からうつつと現代の実存感につながっていくあたりが旧くて新しい。身を立てるために二重三重の性格を持つとか、真の我と矛盾する苦痛を語るあたり告白調で、歌集の自序にはめずらしい。当時の立身出世の時代風潮と、自我、内面の葛藤が生じている。

真の我に帰ることはいよいよ少なくなるとなり、そのときひっそりと歌を詠む。そのとき「天地の間に僅かに我が影を発見する」というこのささやかさに注目したい。これは先行世代の正岡子規や与謝野鉄幹や晶子とはずいぶん違う。日清戦争の時代は国のナショナルリズムの気運と個の精神（自我というべきかどうか）が一致している、短歌の情熱も時代の高揚、野心と直結していた。

次にあげるのは牧水の師である尾上柴舟の「短歌滅亡私論」。短歌史では何度か短歌滅亡論が登場するが、その初めてのものとしてよ

短歌滅亡私論

尾上柴舟

私の議論は、近來の短歌が、昔のやうに一首々々引き抜いて見るべきものでなく、五首ならば五首、十首ならば十首と作家が讀者の前に呈出したものを、一括して見るべきもの、殊に一人の歌集の如きは、何百首あらうとも、それを一として見るべく、個々として見るべからざるものとなつたといふに於て初まる。この前提が承認せられたならば、直ちに次の事は結論として出て来なければならぬ。それは、數多の歌がたゞ一として見られるならば、何故に始めからそれらをたゞ一つとして現はさないか、それを一々に分解した形であらはず必要はないであらう。勿論、短歌のみでない、より長い形をもつ如何なる作物でも、その一瞥のみからでは、作者は見えない。必ず、數多のものを聯ねればならぬのであるが、猶その一つでも、大體は分らぬ事はない。しかし、より短い短歌では、この事はよほど困難である。猶多くを聯ねて作者その人を見るが得策であり、且つ正當である。故に、多くを一つとして見る事となつたのは、當然の進歩である。然らば其結果は、また前の如くなつて来べきであらう。

私の議論は、また短歌の形式が、今日の吾人を十分に寫し出だす力があるものであるかを疑ふのに續く。三十一音の連續した形式に、吾々は學生の力を托するのを、何だか、まだ

ろつこしい事のやうに思ふ。ことに、五音の句と、七音の句と重疊せしめてゆくのは、日本語が、おのづから五音七音といふ傾を有つた當時ならば、自然に出来る方式であつたであらうが、これを脱した、自由な語を用ゐる吾々には、これに従ふべくあまりに苦痛である。更にこの五音七音を二重にして、更に七音を加へた一形式に於いては、畢竟、自分らに捉はれた處があるからである。世はいよ／＼散文的に走つて行く。韻文時代は、すでに過去の一夢と過ぎ去つた。時代に伴ふべき人は、とく覺むべきではあるまいか。

私の議論は、また短歌の、主として言語を驅使することが、また、自分らを十分に寫しえないと思ふのにも連なる。今日の生きた言語は、王朝以來、または時々々々以前の大部分死んだ言語と同じくない。その生きたのを棄て、ある度まで否むしる多く死んだものを用ゐるには、何の意味をも發見しない。吾々は「である」また「だ」と感ずる。決して「なり」また「なりけり」とは感じない。これを感じたかの如く云ひまた感じたか如く聞く。ともに憐れむべきことではないか。ことに、それを層々重ねて用ゐるに至つては、いよ／＼今日の吾々ではない。吾々は、十分正直に、吾々を現はすべき語を用ゐねばならぬ。

かくの如き理由の下に、吾々、少なくとも私は、短歌の存續を否認しようと思ふ。而して猶、その廢滅した時を以つて國民の自覺が眞に起つた時として尊重したいと思ふ。しかし今日の私は、まだ古い私に捕はれてゐる。

く取り上げられる。この年に牧水の発行した文芸誌『創作』明治四三年一〇月号に掲載された。師といつてもまだ三五歳で若い。

私の議論は、近來の短歌が、昔のやうに一首々々引き抜いて見るべきものでなく、五首ならば五首、十首ならば十首と作家が讀者の前に呈出したものを、一括



尾上柴舟(日本近代文学館 提供)

して見るべきもの、殊に一人の歌集の如きは、何百首あらうとも、それを一として見るべく、個々として見るべからざるものとなつたといふに於て初まる。この前提が承認せられたならば、直ちに次の事は結論として出て来なければならぬ。それは、数多の歌がたゞ一として見られるならば、何故に始めからそれらをたゞ一つとして現はさないか、それを一々に分解した形であらはず必要はないであらう。(略)

私の議論は、また短歌の形式が、今日の吾人を十分に写し出だす力があるものであるかを疑ふのに続く。三十一音の連続した形式に、吾々は畢生の力を托するのを、何だか、まだろつこしい事のやうに思ふ。(略) 世はいよいよ散文的に走つて行く。韻文時代は、すでに過去の一夢と過ぎ去つた。

「韻文時代」というのは明星の時代をさしている。自然主義の小説が盛んになつてきて、みな散文を指すので、こういう論になつたのだろう。韻文でも詩はさかんだから「過去の夢」とは言い切れないが、三十一音が「畢生の力を托す」にはまどろっこしい、という

感想は起こるべくして起こつたといえる。もう短歌でもないなあ、と書いた時期あたりから、牧水や啄木のごくさやかなものとしての短歌が存在感を示し始める。ふしぎなものだなあと思う。

この「短歌滅亡論」は反論の方が多かつたらしい。『創作』一一月号の石川啄木の「一利己主義者と友人の対話」は、対話形式でもともラディカルな短歌論だが、その中にはやく反論らしきものを入れている。翌月にこれが載るといふ速さには驚いてしまう。牧水の編集の手際も良かったのだろう。

ついでながら、牧水が啄木に初めて会つたのは、この一一月であつた。『創作』に啄木の歌もすでに載せていて、名前はよく知つているのに対面したことはなかつたのである。牧水が白秋たち四人と浅草をぶらついていたとき、ばつたり啄木に出会つた。他の人はみな知つていたが、牧水だけは知らない男で、紹介されたのだつた。「恐しく氣持の好い顔をした男」と牧水は書く。そして「僕が石川君の健全な姿および声を見且つ聞いたのはこの短い間が最初でそして最後であつた。」と。翌年二月、啄木は病に倒れる。その後、啄木の病中を見舞い、親しくなり、明治四五年、臨終に居合わせたのは牧水であつた。



石川啄木(石川啄木記念館 提供)

石川啄木の「一利己主義者と友人の対話」(『創作』明治四三年一一月号 二五歳)の一部を引用する。

- B 君は何日か短歌が減びるとおれに言つたことがあるね。此頃その短歌滅亡論といふ奴が流行つて来たぢやないか。
- A 流行るかね。おれの読んだのは尾上柴舟といふ人の書いたのだけだ。(略)
- あれは尾上といふ人の歌そのものが行きづまつて来たといふ事実立派な裏書をしたものだ。(略)
- 一応尤もに聞えるよ。しかしあの理屈に服従すると、人間は皆死ぬ間際まで待たなければ何も書けなくなるよ。(略)
- 仮に今夜なら今夜のおれの頭の調子を歌

ふにしてもだね。(略)

連続はしてゐるが初めから全体になつてゐるのではない。きれぎれに頭に浮んで来る感じを後から後からときれぎれに歌つたつて何も差支へがないぢやないか。一つに纏める必要が何処にあると言ひたくなるね。(略)

一生に二度とは歸つて来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。たゞ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。

こうして読むと牧水と啄木の短歌への考えはとてもよく似ている。いのちはそのときの一步一步、一秒一秒であり、その碎片(きれぎれ)を掬うのは短歌という小さな詩形こそなのだ、という思いは共通している。

短歌は短歌で歌えることを歌えはいい、という考えが出てきた背景には、この時代みない人が小説も書けば詩も散文も書いて、表現手段は短歌だけでなかつたこともあるだろう。啄木も小説も詩も評論も書いた。牧水も早くから小説らしきものや長詩を書いている。短歌ですべてを語る必要はないのである。

北原白秋にしてもそうだった。詩集で評価

を得たのちに大正二年に初めての歌集『桐の花』を出す、その中には多くのエッセイはさんでいる。そこに

私の詩が色彩の強い印象派の油絵ならば私の歌はその裏面にかすかに動いてゐるテレピン油のしめりであらねばならぬ。

と書いている。かく限定するからこそ、このの宝にもなる。

このささやかな限定こそが、名歌を生んだとも言えるのではないだろうか。

いまなお愛誦される短歌は、だいたいこの時期に生まれていたのである。

「短歌滅亡私論」の「短歌が昔のやうに一首々々引き抜いて見るべきものではなく」という点については、反証するがごとくこの時期の歌は一首引き抜いて十分鑑賞に足りる。同時にまた、この若い歌人たちは歌集としても読めるように編集、構成もしたのである。啄木や牧水はドラマ、小説の要素を引き入れたし、白秋は新しい感覚の季立てとして、茂吉もまた逆年体や連作のドラマ性を呼びこんでいる。そしておのおの多様なジャンルから、少しずつ軸足が短歌に移りつつあった。

大正期にはジャンルの垣根が出来て、歌人は歌人として、また流派ごとに短歌結社に立

てこもる時代になっていく。

ところで、牧水は「短歌滅亡私論」を書いた尾上柴舟の門下生である。牧水は柴舟について「若し私に明治の新しい歌を詠み出した人を求めさせたら私は躊躇なく尾上柴舟を第一に置く」(「牧水歌話」と書いて評価している。明治四二年に出た『永日』(柴舟三四歳)から、歌を引く。

しらぬ人今日も来たりてわれを呼ぶあは
君が名は老かあらぬか
何をもて昨日をさだめ今日を云ふ風はう
たへり同じ声して
ふるびたるおもひを思ひ恋を恋ひかくし
て今日の日を失ひぬ

もつといい歌はあるのだが、こういう発想の歌が多いということを選んでみた。一首目は「古い」を「知らぬ人」と擬人化している。二首目は風は同じに吹くのに昨日と今日とはどこで区別するのだろうか、という感じ。三首目は思いを思う、とか、恋を恋する、とか、観念的なことをしてるうちに肝心の今日という日を失っている、という。いずれも時間というものに関心があり「失われた時をもとめて」のような思索性が調べに漂う。こういう

西欧的な思索は牧水にも流れ込んできているように思われる。調べの抑揚も牧水に影響を与えていそうだ。

白鳥しらとりは哀かなしからずや空の青海のあをにも
染しみまずただよふ
『海の聲』

白いの空の青にも海の青にも染まらないで漂う鳥。心のシンプルな投影で「染まず」という個のありようというモチーフはとても西欧的だと思う。韻律も「空の青／海をあをにも」のあたり、とても新しいのだが、なつかしく心を揺らす。

とこしへに解とけぬひとつの不可思議の生
きてうごくみづかと自らをおもふ

『独り歌へる』
人見れば忍しのちうすき皮を着るわが性ゆゑ
の尽つきぬさびしさ 『独り歌へる』
わが足のつきたる地ちもうらさびし彼の蒼
空の日もうらさびし 『路上』

「不可思議の生きてうごく」という感覚と表現は実存的で新しい。他人を見るとたちまち（化けの）皮を着る。この歌は『独り歌へる』の自序と重なる。他人に見せるのは真の自分ではない、そのさびしさ。足に着いた地ちもさびしいし、見上げる空もさびしい。天地のど

こにも居場所がないという感情は、空にも海にも染まらない白鳥でもある。

最後に『創作』に載った牧水と啄木の歌をあげてみたい。明治四十三年の秋の歌である。

牧水

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろび
しものはなつかしきかな 『創作』『路上』
白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづ
かに飲むべかりけれ 『創作』『路上』
あはれ見よまたもころはくるしみをの
がれむとして歌にあまゆる

『創作』『路上』

啄木

燐寸マチチ擦チれば二尺ばかりの明るさの中を過
ぎれる白き蛾のあり 『創作』『一握の砂』
地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつ
つ秋風を聴く 『創作』のみ
明治四十三年の秋わが心ことに真面目に
なりて悲しも 『創作』のみ

啄木のうしろ二首は歌集に収録していない。同じ年の秋の歌として、作風は対称的であるが、どちらも「時代閉塞」のくるしき、居場所のなさを感じていたように思われる。それぞれ悲哀は短歌にこそ抛りどころを求めはじめていた。

『筆者プロフィール』 はなやま たかこ



昭和二十三年東京生れ。同志社大学文学部卒。昭和四十三年「塔短歌会」に入会、現在、選者。平成六年『草舟』で第二回ながら現代短歌賞、同十一年『空倉』で第九回河野愛子賞、同十九年『木香薔薇』で第十八回齋藤茂吉短歌文学賞、同二十三年『雪平鍋』三十首で第四十七回短歌研究賞、同二十四年『胡瓜草』で第四回小野市詩歌文学賞をそれぞれ受賞。そのほかの歌集に『樹の下の椅子』『楢の実』『砂鉄の光』『春疾風』『木立夕リア』『晴れ・風あり』。歌書に『森岡真香の秀歌』がある。平成二十九年十月一日に開催した第六十四回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。

旅と酒を愛した歌人 没後九十年 若山牧水 歌と憧れ

「寂しさ」終てぬ人生歩く

孤独な旅と酒を愛した歌人、若山牧水（一八八五～一九二八年）。今年は没後九十年にあたる。美しい調べと詩情をたたえた歌の数々は人々の心を打ってやまない。名歌秀歌を口ずさみながらゆかりの地を歩くと、歌人が胸のうちに灯し続けた「あくがれ（憧れ）」が今に伝わってくる。

牧水の短歌はなぜこうしみじみと響くのだろう。名高い一首を読んでみよう。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも
染まずただよふ

あの沖の白い鳥は悲しくないのだろうか、空の青にも海の青にも染まることなく漂って――。この歌は声に出して読みたい。「白鳥はかなしからずや」に詠嘆を込め、「空の青海のあをにも」と静かに受けて、最後は「染まずただよふ」でぐっと力を入れる。

第二句と第四句で切れるこの調子は、日本人が古来親しんできた韻律だ。歌は心を調べに託すもの。牧水の短歌は口に出し、耳で聴いてこそ味わい深い。

生まれたのは今の宮崎県日向市の山間部だ。あなたに尾鈴山の威容、目の前を坪谷川が流れる地に生家が残る。「景観は牧水の時代とそう変わっていません。特別なものは何もない。この『由緒のない自然』が歌心を養ったのだと思います」。歌人で若山牧水記念文学館長の伊藤一彦さんがそう説明してくれた。

行き行くくと冬日の原にたちとまり耳をすませば日の光きこゆ
陽光が降り注ぐ音が聞こえるほどに鋭い感覚があつたから、心はおのずから美しい調べとなつて流れた。坪谷の地に立つと、故郷のまばゆい光が天衣無縫の歌人を生み育てたのだと実感される。

☆☆☆

上京して早稲田大学に入學。歌才すでに優れ、心のまま詠みに詠んだ。（白鳥は）のよな代表歌も見事だが、恋の歌では

君睡れば灯の照るかぎりしづやかに夜は
匂ふなりたちばなの花

と官能的な歌いぶりも見せ、青年歌人はきらめく才能を歌壇に示す。

牧水は旅に生きた。手には洋傘、すねには脚絆、わらじ履きでどこまでも歩く人だった。北海道から九州、さらには朝鮮半島にまで足跡を残している。妻子を家に置いて、漂泊また漂泊。生涯に詠んだ約八七〇〇首のうち、実に三分の一が旅の歌であるという。

よく知られているのは群馬県東部への旅だろう。一九二二年の秋、草津から東へ、約三週間にわたるその旅程は、紀行文「みなかみ紀行」を片手に今もたどることができる。山あいの道を歩きながら、牧水は次々に歌を詠んだ。

あきらけく日のさしとほる冬木立木々と
りどりに色さびて立つ
天地のいみじきながめに逢ふ時しわが持
ついのちかなしかりけり

草津温泉と沢渡温泉を結ぶ暮坂峠には、旅

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ
 国ぞ今日も旅ゆく

「酒の歌人」でもある。一日に一升二升と飲む筋金入りの酒豪だった。そして飲むほどに歌が生まれた。

かんがへて飲みはじめたる一合の二合の
 酒の夏のゆふぐれ

は、「の」のとめどない反復が酔いの深まりを
 思わせ心憎い。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづ
 かに飲むべかりけれ

も巧緻だ。「し」がきりりとした頭韻を踏む
 上の句から、重厚な濁音の下の句へ。この調
 べそのものが、酒を口に含んでから胃の腑に
 落ち着くまでの感覚を表すようだ。

☆☆☆

晩年、東京から静岡県沼津市に居を移した。
 富士を望む千本松原にほど近い。「山深いと
 ころで育った人だから、海への憧れが強かつ
 たのでしよう。自然への思いは深く、行政
 が松の伐採計画を打ち出したときには先頭に
 立って反対しました。牧水は千本松原を守つ
 た「沼津の恩人」です」。沼津牧水会理事長
 の林茂樹さんはそう話す。

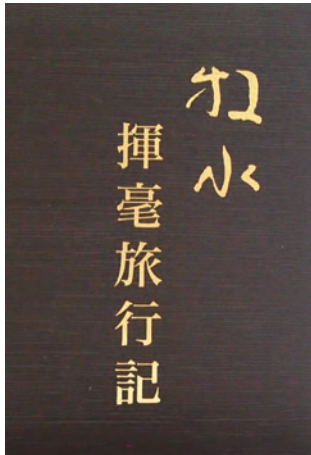
歌誌発行の経費を賄うため、自分の歌を揮毫する旅に出た。先々では当然酒を飲む。さすがに体はむしばまれた。破滅型というのではないが、牧水の人生には自らの命と引き換えに歌を残したという印象がある。歌人の伊藤さんはいう。「牧水の文学は『あくがれの文学』。あくがれとは、心がここならぬ場所へさまよいだしていくという意味です。有限の存在である人間が果てしなく何かを追い求めていくのが人生。傷つくことや挫折を恐れず対象にぶつかっていく態度を、私たちは牧水から学びたいですね」

牧水が「寂しさ」と呼んだのは、やむことのない「あくがれ」だったのか。だとすれば、彼がしょんぼりと歩いたわけがない。さうとした足取りで、前へ前へと突き進んだはずだ。

けふもまたこのころの鉦をうち鳴しうち鳴し
 しつあくがれて行く

(日本経済新聞社文化部 干場達矢)

*日本経済新聞元旦第三部に掲載された記事を転載させていただきました。



昨秋、沼津市若山牧水記念館開館三十周年を記念して「牧水と旅」をテーマに「特別企画展」を開催し、牧水の「揮毫旅行」を記録した『牧水揮毫旅行記』を刊行いたしました。

大正九年、ほんの二三年のつもりで沼津に移住して来た牧水は、富士山を仰ぎながら暮らせる沼津が気に入り、家族の健康のためにも沼津へ永住することを決意しました。

永住するためには、執筆活動のための書齋と『創作』の発行所を兼ねた住宅の建設が必要でした。建設資金を調達するための「揮毫頒布会」を計画し、揮毫頒布のための旅行もし、大正十四年に念願の家が完成しました。

「揮毫の旅」について記された紀行文と喜志子夫人の旅行記を収録いたしました。頒価千円。当館で取り扱い中です。

第二十八回

中学生短歌コンクール

二十八回目となる中学生短歌コンクールは、市内十七校から応募された短歌総数は一八六〇首であった。入選歌五十首の内、特選十首に選ばれた者は、十月十五日、雨天のため沼津市若山牧水記念館での開催となった沼津牧水祭・碑前祭で表彰を行った。特選十首を紹介する。

目をとじて大仏殿に友といる香のにおいと静かなお顔 高村真砂(第四中)

修学旅行の一場面であろう。香のにおいという嗅覚を詠い込むことで、大仏殿の厳肅な雰囲気や、静かに友と佇む様子が眼前する。

おじいちゃん勝てぬ病と闘つた別れを告げた六月七日 渡辺友希乃(大岡中)

成長するにつれて、人の死と向き合う機会も増えてくる。病と闘つた祖父を見つめ続けた作者であるが、六月七日という具体によって、悲しみがよく伝わる。

炎天下かげろうの見えるグラウンド眠い目を開き静かに耐える 多家千織(第二中)

「かげろう」と言う言葉をグラウンドに発見した作者の景色の切取りの良さで、気分がよく分かる歌である。

我が家ではさくら散りゆく春の日に母特製のお茶を味わう 菅原貫太(門池中)

新茶を家族で味わうという場面は、さわやかで気持ちのいい感じがする。母特製という言葉に、少し意味のブレがあるが、作者の嬉しい気持ちや表れた言葉である。

遠眼鏡のぞいた先のプレアデス指をかすめた星の囁き 佐藤 優(戸田中)

プレアデスの和名は「すばる」。おうし座にある明るい星団である。肉眼でも見えるが、作者は遠眼鏡越しに見ている。美しい星団を見た感動が、指をかすめたという比喩の鮮やかさで読者に伝わる。

「でていけ！」と怒られたのででていくと「なぜでていく！」とまた怒られる 西井睦騎(金岡中)

面白い歌である。大人の矛盾をついて、アイロニカルな詠いぶりに、作者のユーモアを感じる一首である。

「おきてよ」と響く目覚ましむしをする今日 は部活あるというのに 萩原寛喜(原中)

「むしをする」という言葉の幹旋が現代的で面白い。むしする対象は目覚まし時計であり、それをセツトしたのは作者自身である。自らをむしする様な詠いぶりが目を引いた。

この一球決まればデユース絶対に負けてたまるか力こめる 石田琉菜(今沢中)

中体連大会の一場面であろう。短い時間の中で作者の感情と、具体を詠い込んで、臨場感のある歌となった。

袖と裾短くなった妹と変わらぬ丈の私の浴衣 太田原美希(市立中等部)

成長期である作者にとって、身長は大きな関心事である。浴衣を通して、背の伸びた妹を感じて、うらやましく思っている作者である。

夏の夜本栖湖畔に舞い降りる漆黒の王ミヤマクワガタ 望月一求(暁秀中)

歌意としては、本栖湖畔にミヤマクワガタが飛んできたというのだが、「舞い降りる」や「漆黒の王」と言う言葉で、一気にミヤマクワガタの存在感が増す。不思議な雰囲気のある歌である。

選は、沼津牧水会理事の曾根耕一、青木朝子、永久保で行った。(永久保英敏)



第64回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式
平成29年10月15日(日)

第二十二回若山牧水賞に三枝浩樹氏の『時禱集』



(宮崎日日新聞社 提供)

第二十二回若山牧水賞は三枝浩樹氏の『時禱集』に決まった。受賞作は三枝氏の十六年ぶりの第六歌集。授賞式は平成三十年二月七日（水）宮崎市の宮崎観光ホテルで行われた。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、栗木京子、伊藤一彦の四氏である。

同日、選考委員である高野公彦氏の「牧水と食べもの」と題した記念講演が行われた。翌八日（木）は三枝浩樹氏による「新しい牧水」の演題で受賞記念講演会が延岡市のカルチャープラザのべおかで催された。

三枝氏は昭和二十一年山梨県甲府市に生まれる。兄は第七回受賞者三枝昂之氏。高校一年生の時に短歌結社「沃野」で作歌をはじめ。大学時代に同人誌「風車」を創刊。同

線で活躍する人でありながら青年っぽい初々しさを感じる」。

伊藤一彦氏は「歌は人なり」で、歌を見ていると彼の爽やかな生き方が表れている」と各々評した。

『時禱集』から自選十首を紹介する。

きみなくてレリクヴィエを聴きいたり
外の面は雨のしののめらしい
野に熟れたるトマトの甘さひとふりの塩
きらめきて色の濡れたり

イフェマールとはつかのまのいのちにて
そのつかのまをわれらは生くる
野の道に西日翹みてワレモコウいろあざ

やかに立ちいたりけり
ひとりにひとつの死、ふたつなき死を負
えば歎歎しかなる雪に降る雨

うつしよに母のいまさぬ四季めぐり今朝
甲斐が嶺に雪しろく積む

おのずから胸に浮かびてとどまればしば
し秘密のごとく母恋う

きみの中の花瓶は修復できるからなす
なすずしろを摘みにいこうか

谷間ながるるひと幅の水 秋ふかきひか
りはこんなところにも居る

ゴドーを待ちながら人生がすぎてゆくか
たえの人もようやくやく老いぬ

四十四年法政大学文学部英文学科を卒業。同年福島泰樹、伊藤一彦、三枝昂之らと同人誌『反措定』を創刊。同四十六年受洗。「かりん」、「りとむ」を経て平成二十一年「沃野」に復帰し代表となる。現代歌人協会、日本歌人クラブ各会員。山梨県歌人協会会長。山梨文化学園講師。歌集に『朝の歌』『銀の驟雨』『世界に献ずる二百の祈禱』『みどりの揺籃』『歩行者』。文庫歌集に『三枝浩樹歌集』『続三枝浩樹歌集』。評論集に『八木重吉たましひのスケッチ』。平成二十八年「二〇一五年夏物語」三十一首で第五十二回短歌研究賞を受賞。選考委員の佐佐木幸綱氏は「歌数が多く話題も多岐にわたり、人生の厚みや深さがある歌集。三枝氏が正面から人生を深く見つめ、歌おうとしている姿勢が感じられた」。

高野公彦氏は「三枝氏はキリスト教の信仰者だが直接歌った歌はあまりない。しかし、『神』を意識しそれがかすかに歌の深いところに働きかけている。『神』を感じ、見守られていくという感覚。作品に優しさを生み出している」。

栗木京子氏は「清らかな叙情性と祈りの気持ちりが全てを覆っており貴重だ。社会の第一